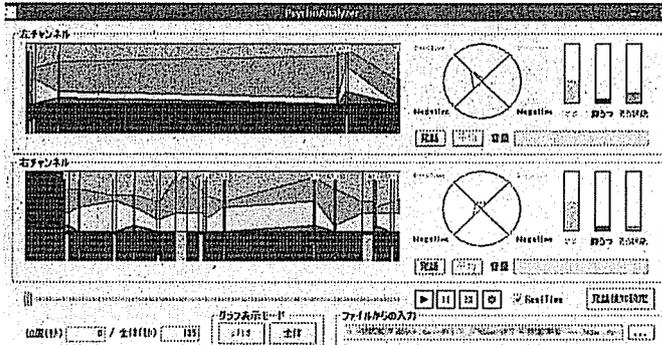


音声で「うつ」早期発見

感情認識技術を応用

国内・米国で実証実験



PSYを組み込んだ「サイコアナライザー」の画面。音声から抑うつ状態を診断する

AGIが東大などと連携

AGI（東京都港区、光吉俊二社長、03・5575・1457）は、東京大学、情報通信研究機構、日本疲労学会、病院、企業などと連携し、音声による「うつ」の早期発見の実証実験に8月にも乗り出す。同社の音声感情認識技術「ST」を医療分野に活用。実用化をにらみ、医療機関を通じてうつ患者と健康者の大規模な音声データを収集し、うつと判断する認識技術の精度を高める。言語の異なる海外への展開を狙い、米国での試験も予定している。

AGIのSTは、言葉の意味ではなく音声の周波数特性や大きさの変化から、6種類の感情状態を自動的に判断できる技術。話し手の感情でLEDの色が変わるNECの「言花（KOTOHANA）」に組み込まれた実

績があるほか、セガのDS用ソフト「音声感情測定器 コロスカン」、アイフォーン用アプリ「マインドリーダー」などにも採用されている。こうした機能を「心の健康度合い」の測定に活用する。すでにSTをベースに、臨床心理士の診断で抑うつ傾向と判断された人の音声と健康者の音声を比較し、抑うつ状態を明らかにする「PSY」ソフトを試作済み。精神科医や医療機関と協

力しながら、音声データ収集とそれによるPSYの精度向上に取り組む。ゆくゆくはPSYを使った対面診断ではなく、国内の携帯電話事業者と協力も模索。被験者の同意を得た上で、携帯電話のチップに日常通話を記録し、長期間の感情変化の推移からPSYで抑うつ傾向を把握できるようにする。

一方、海外では7-8月にかけて米国で実証試験を実施。AGI顧問で家族療法家の中上晶子氏が、テキサス州の複数の大学と協力し、携帯電話でうつ病患者と健康者の音声データを収集する。最近ほうつ病患者が急増し、社会問題にもなっている。光吉社長は「うつは早期に発見すれば治りやすいが、うつかどうかの判断が難しい。症状が軽い段階で医師に相談できるように、予防医学的な手段として技術を確立させたい」と話している。